

あなたの生活に 文学を

阿部 公彦

きます。

著者は無名の新人。それだけで私たちは「きつとほんとうの話だ」と思い込みがちです。災害の記憶はまだ生々しく、「被災者でないのに被災者のふりをするのは失礼だ」「現実のすごさにはかなわない」といった心理が働くからでしょう。

しかし、文学はそうした束縛を越えようとする。「本人」でも「ほんとう」でもないからこそ、とらえられる真実がある。実際、この作品を読んでいると途中で「本人なの？」との問いがどうでもよくなり、ます。それよりも「この人、何でこんなに怒ってるの？」

が気になる。語り手は終始イライラや憤怒に駆られ、そのエネルギーで書き、また読ませる。構成や配役はごくシンプルです。描写も凝らない。でも、怒りのせいか視線があちこちに鉄砲玉みたいに飛び、鋭く現実の皮をめくりまわります。段替えなしで延々とつづく冒頭の写真撮影のシーンから、母親の死をめぐる「もしも」と主人公が煩悶する最後の心理描写まで、投げつけるような強烈なことばの連続で、読者はのんびり感動させてもらえません。ずっと居心地が悪い。でも、そんな語りだから、この題材についてまだ言われ

文学賞は賑やかで楽しいものです。すぐれた作品が注目を集めるのはいいこと。ただ、小説が「よい、どん」の横並びで競争すると考えるのは間違いでしょう。作品ごとに読みのツボは異なるし、読む側の姿勢も変わります。評価となれば「重基準どころか多重基準が当たり前。たとえば、ふだんは小説＝虚構と考える人も、ある種の作品だと「これはほんとうのこと」と気にします。

群像新人文学賞の北条裕子さん「美しい顔」（「群像」6月号）は、2011年の東

日本大震災が題材です。津波で母親を亡くした女性が、美談を求めるマスコミなど周囲との軋轢の中で、どう自分の心と折り合いをつけるかを描



絵・片山高志

新人 奥行きある震災文学

北条裕子「美しい顔」

ていないことが言えた、と私は感じました。読者を突き放す距離感がきき、奥行きある震災文学になっています。

多和田葉子さんの「地球にちりばめられて」（講談社）も、安易な没入を許しません。イライラしてるわけではないのですが、何となく剣呑な気配がある。小説中で世界を描いておきながら（そんなのうそっぱちかもよ）との小声が聞こえるのです。

いちおう主人公はいるけど、どこまでまじめなのでしょう。「本筋」があるのかもわからない。ただ、次々に起きる「脱線」が魅力的で、気がつくときに入るように読んでしまう。脱線の絡み合いに迷いこむのが快感なのです。試しに、主人公のHirukoが語る「たまごちごち」という創作童話をチラ見してください。38ページです。

対照的なのが平野啓一郎さんの「ある男」（「文学界」6月号）。複数の伝聞を組み合わせながら「真相」へと迫る、サスペンス感満点の作品です。冒頭は小説家自身と重なる声で語られますが、語りのバトンは弁護士・城戸の手に渡り、さらに里枝へ。里枝は死んだ夫の情報がすべて偽物だと知らされたばかりの女

読者に寄り添うスタンス

平野啓一郎「ある男」

性です。しかし、その奥に、そのさらに奥にと物語が隠れている。複雑な仕掛けです。こうした入れ子型の小説は昔からありますが、平野さんはこの仕組みを通し、読者と作家のつながりを回復しようとしたのかと思います。あえて文学風の表現を抑え、「美人だな」「胸が張り裂けそう」といった等身大の言い回しを多用。他者への共感や「正しさ」といった素朴な問題を正面から語ろうとします。構造こそ凝っていますが、読者を突き放すよりは寄り添うスタンスです。社会の中で小説がどう機能しうるのか考えた末のひとつの選択でしょう。

谷崎由依さんの「藁の王」（「新潮」6月号）も小説家の声の前面に立ちます。全編を覆うのは一つの濃厚な声。大学で創作を教える主人公が、書き手の姿と重なります。

谷崎さんはピッチャーで言えば「球威で押すタイプ」。そこには北条さんとの共通点もありますが、学生との人間関係に悩みながら「わたしは藁でできた張りぼてで、そして彼らとの繋がりもまた思い込みだったのだろうか」と述懐するあたり、重さや苦しさを語りつつも周囲を自身の心境に引きこもつとする姿勢が見えます。否定的だけど、距離の短縮を目指すのです。読者にその用意があれば、すっぽりと入れる世界かもしれせん。（英米文学者）

その時
然と走り
の後方を
た。みな
車を越え
順に槍を
土手の
土手を駈
後方で
たちはも
し、刀を
突き足立
り、別の
部隊は三
彼らも